

# 社会福祉法人カリヨン子どもセンター

大丈夫。一緒に考えよう。

ひとりぼっちじゃないんだよ。あなたは大切な人。

## News Carillon No.53

### 『一緒に、楽しい時間をすごそう』

#### 4年ぶりのクリスマスパーティー

「ハンドベルは、“カリヨン”の演奏練習のためにつくられた楽器なので、私たちの法人名とゆかりが深いのですよ」

と、解説を添えて、クリスマスソングの開会演奏がはじまります。演奏するのは、理事長、職員、ボランティアスタッフら選抜メンバー。業務の合間をぬってこのために練習をしてきました。2023年12月某日、カリヨン子どもセンターでは4年ぶりに対面でのクリスマスパーティーを開催することができ、総勢75名の子ども、若者、関係者が集まりました。お子さんや、パートナーと共に参加してくれた方もいます。

クリスマスパーティーは、夏のアウトドアイベントと共に、カリヨン子どもセンターでかわった子どもたちと再会する機会、近況を教えていただきつつ、エールをお送りする機会として開催してまいりました。ホームやカリヨンハウスから、あるいは子ども担当弁護士を通じて、開催案内と参加申込みを受け付けます。会場を

手配し、お食事やお土産を考え……だんだんと、一大プロジェクトになってきました。

新型コロナウイルスの感染防止のため、やむなく実施できなかった時期も、交流がとぎれないように、プレゼントを郵送しました。こうした集いや贈り物の手配のため、ご寄付を使わせていただき、感謝です。このパーティーやプレゼントは、カリヨンの職員や理事、子ども担当弁護士のみならず、たくさんの支援者の皆さんが幸せを祈ってくださってる証しなんだよ、と、子ども、若者たちへのクリスマスカードに書き添えて、お伝えするようにしています。



#### INDEX

- 一緒に、楽しい時間をすごそう … 1
- 子どもシェルター全国ネットワーク会議・全国大会 in 広島開催等 … 3
- 子どもの家ボーイズから Part.29 「お気持ちだけで」 … 4
- とびらの家通信 Part.42 「馥郁（ふくい）たる日々」 … 5
- タヤけ荘便り Part.38 「勝手知ったる新職員」 … 6
- 子どもの家ガールズとともに Part.44 「誰かの「困った」に」 … 7
- もがれた翼 Part.28 『シン・フォニイ』上演報告 … 8

パーティーでは3名の若者がカラオケで自慢の歌声を披露してくれました。この余興を引き受けてくれる方を募集したところ、思いのほか、たくさんの方からお申し出があり、時間の制約もあって、涙をのんで先着の方からお願いしたのですが、他の皆の歌も聴いてみたかったです。誰も手をあげてくれなかったらどうしよう、という職員の心配は杞憂に終わりました。若い方たちのポジティブな行動は、ときどき私たちおとなたちの予想を軽々と超えていきます。何よりも、一緒に、楽しい時間をすごそうと、協力を申し出てくださったことが嬉しかったです。こうなったら、いずれ、カラオケ大会を開催するのはどうかしら？と、次なるお楽しみの目標ができました。



全員がエントリーできるゲームは、カリヨンの4つのホーム(2つの子どもシェルターと、2つの自立援助ホーム) + 理事長対抗じゃんけんの勝者予想をしました。皆さんの期待を背負い、ホーム長たちと理事長がじゃんけんぽん!

勝者は、1番オッズが低かった(つまり1番人気が高かった)、カリヨン子どもの家ガールズのホーム長でした!



ブッフェ形式のお料理を楽しみながら、OGOBの皆さんから職員へ、ご自分の近況報告をするおしゃべりが、そこそこで華やぎます。デザートに登場した大きなクリスマスケーキは、とても“映え”ましたので、長めの写真撮影タイムが必要でした。



“パーティーに参加できないけれど、私のことを忘れないでください”、OGOBさんから、そんなお声も寄せられます。“忘れるものですか!”と、参加できない方たちには、今年もプレゼントを郵送しました。当日お土産としておわたしする分と郵送分あわせて、140個余の品物を、事前に職員総出でラッピングしました。皆さんの笑顔が見られたら、準備したかいがあったというものです。



子ども、若者たちは、今いる場所で、それぞれに自分らしく生きていく道を模索しているようでした。学生あり、社会人あり、療養中の方あり、離れた家族と対話を試みる方あり、新しい家族をつくる方あり……次に会えるときまで、どうか健やかで、そのときどきの出会いに恵まれ、道のりが安全であるようにと祈っています。🙏

## 子どもシェルター全国ネットワーク会議・全国大会 in 広島開催 こども家庭庁 令和6年度「こども若者シェルター・相談支援」事業とは、はたして？

2023年9月30日(土)～10月1日(日)、広島弁護士会館にて、子どもシェルター全国ネットワーク会議・全国大会 in 広島が対面開催されました。こちらも過去3年はオンライン開催でした。写真は運営分科会の様子です。



ゆるやかなネットワーク「子どもシェルター全国ネットワーク会議」には、2024年1月24日現在25団体(正会員22、準会員3)が加盟し、全国で16軒の子どもシェルター(自立援助ホームとのハイブリッド型を含む)が運営されています。それぞれの団体が直面する運営上の課題に対して、共に知恵を出し合ったり、子どもシェルターにまつわる要望を協働で国や自治体へ申し入れたり、研修や経験交流をし、新しい法人・施設の立ち上げをバックアップするなど、支えあっており、全国会議はそうした日々の実践の凝縮版ともいえる貴重な交流のひとつです。

嬉しいご報告です。休眠預金活用事業にて、「子どもシェルター新設事業」が行われ、全国で4つの実行団体がこのプロジェクトに参加しています。このうち、NPO法人子ども・若者センターこだまの子どもシェルターが、東京・多摩地域に2024年1月に開設しました！

また、公益財団法人キリン福祉財団の助成を受け、「子どもシェルター運営指針」を作成、それに基づいて「子どもシェルター第三者評価基準」を策案し、子どもシェルターへの第三者評価のモデル実施を予定しています。

ところで、こども家庭庁から令和6年度(2024年度)新設予算事業として、「こども若者シェルター・相談支援事業」が公表されました。子どもシェルター全国ネットワーク会議では、こども家庭庁令和5年度子ども・子育て支援等推進調査研究事業「こども・若者の居場所の確保に関する実態把握のための調査研究」に協力していますが、そちらとも関係なく立ち上げられた同事業の突然の発表にとっても驚きました。事前に「子どもシェルター」運営団体には、どこにも相談も、折衝も何もなかったのです。

まだ要綱が示されていないですが、こども家庭庁に問合せたところ、当該事業は、既存の「子どもシェルター」とは、別の活動を指すようです。東京のトー横、大阪のグリ下へやってきて、薬物、暴力や搾取と背中合わせの環境に居場所を求める子ども、若者を支援する取組みが想定されているようです。そうした子ども、若者は、さまざまな困難を抱えながらも、現行の社会福祉の諸制度とはマッチングが難しいというジレンマがあります。

自由に出入りをしたい、スマホが手放せないという若者の居場所を求めるニーズと、逃げて、隠れ住まなければならないという避難・保護ニーズの両方にどのように対応していくのか、18歳未満の子どもの場合は親権者と対応は慎重に行わなければならない局面もあり、児童相談所との連携も欠かせません。今後どの団体が、どのように事業を実施するのか、子どもを支える輪として既存の「子どもシェルター」と、どのように連携していくことができるのか、大きな関心をもってしています。

既存の「子どもシェルター」が、児童自立生活援助事業の一類型として認可を受ける運営スキームを導入してから12年がたちます。休止にいたる子どもシェルターもある中で、このままの在り方でいいのか、子どもシェルターが果たしていく役割は今後どのように移り変わるのか、カリヨンにとっても我が事として、考え続けています。🗣️

子どもの家ボーイズから Part.29

## お気持ちだけで



世間の同情を失った。――百年前の児童福祉施設勤務の、同業他社の先輩のお言葉です。太平洋戦争はおろか関東大震災すら3年後の未来である大正9年、現代ならば「寄付が減った」と言うところ、当時はそんな情緒的な言い方でした。『ポーランド児童救済事業の記録』（彩流社2022、大著ゆえ図書館利用が便利）

同書には、シベリアに残された波蘭人の子ども765人を日本赤十字と日本政府が保護し、日本から米国・波蘭への出航に至るまでを支援した国内外の人々の働き、願いのほか、保護を引き受けた福祉施設では児童がさらわれる、近所に投石してガラスを割る、感染症の蔓延（松澤フミ看護婦が殉職。享年20歳）といった事件事故、世上の関心の次第に黄昏れゆく気配が寄付の漸減となって如実にあらわれてくるさまを諦観する職員のつぶやきなどが満載です。

後半「資料編」には、同情してくれた世界中の人々の名前が残されています。貞明皇后。毛利公爵母堂、鍋島侯爵夫人といった華族の方々。青山脳病院長齋藤夫人（榆家の人びと）。さまざまな組合や団体。学校。個人。無名氏、匿名の婦人。田端小1年の林君が1円を、麻布区の小学生大澤君がキャラメルを同情してくれたことも明記されています（震災や戦争を生き延びていてくれたら嬉しいです）。世間というものがどれほど多数の、相互に見知らぬ人々の同情や協力や連携によって運営され存続しているのかということが、この記録だけでもよく分かります。広く福祉に同情して下さった皆様、百年後の未来からで礼儀も分からずすみませんが、どうもありがとうございます。

“将来はカリヨンに寄付する”。子どもシェルターの利用者さんの中には、そんな奇特なことを言う人が多数おられます。

「おれはここを出たら、ここに寄付します」

「おれは将来金持ちになるんで大丈夫です、なんでも寄付しますよ。何が欲しいですか？」  
えー、それじゃあなたが金持ちになるまで我々

もここを潰すわけにはいかんですな、がんばって続けなくちゃいけませんな。

「そうですよ」

こういう会話をもう長いこと繰り返してきました。今のところ OGOB からの寄付はありません。いやありました、シェルターを退居するとき書籍や衣類を同情してくれることはありました。「この本は中学のときに読んで、大好きな本だから、これからここに来る子も読んだらいいなと思って」という甘露な同情もたまにありましたが、だいたいは不要になった古本古着の処分。新しい服はシェルターのを貰って、利用者さんは OGOB となり新しい生活へ。それでいいのです。我々はあの会話を、福祉への感謝と応援のお志として受領しているから。あれは寄付の約束をしたのではない、あの会話自体がすでに寄付だったから。あなたが無事に暮らしていることが一番の寄付です。

そんなある日のこと。いつものように兎相に電話したり検温記録したりトイレのスリッパを揃えたりしていると、事務局からお知らせ。

「OGOB からご寄付を頂きました」事務局さんの声はかすれていた。「お金です」。

心の準備が。これは、受けとめきれない。金額の大小ではなく。ありがたいと思うと同時に、うちなんか寄付しなくていいからあなた自身のために使いなよ、とも思う。カリヨンへの寄付はカリヨンへの寄付じゃなくて次に来る利用者さんへの寄付ですが。有難いやらかたじけないやら。けどほんとにどうもありがとう。もし OGOB でここを読んでいる方がいたら、ご自分の将来のためにお使いになるか貯金して下さい。滋養の付くもの食べるとか。お気持ちだけで。お金は大切に使いましょう。

日頃よりご支援ご同情下さっている皆様。拙文が寄付を欲しがる様相を呈していたら申し訳ございません。違うのです、ただただ各方面にお礼を申し上げたいだけでした。心より感謝申し上げます、本当に有難うございました。

（ボーイズ 職員一同）

北陸の大震災に被災した皆様に心よりお見舞い申し上げます。職員も利用者さんも少額ながら寄付をさせていただきました。お役に立てば幸いです。🙏

とびらの家通信 Part.42

## 馥郁(ふくい)たる日々

### 梅しごと

事務局が間借りしている六右衛門屋敷には、数本の梅の木があります。大家様のご厚意でたわわに結実した梅の実を収穫させて頂きました。5月には梅シロップや梅酒用に青梅を、7月には梅干し用に完熟梅を、リュックと手提げ袋で持ちきれんばかりを頂戴しました。

とびらの家にも、一本の梅の木があります。とびらの家としてお借りする前からあったものですが、数年前から、肥料を施したくさん実るようになりました。しかし、完熟する前に落果し、梅干し用の梅は収穫できませんでした。ボランティアスタッフさんに御指南を賜り、また書物を涉猟し、昨年年初めの真冬の時期に思い切って剪定をしました。先達の助言に従い、何年もかけて少しずつ伸ばした枝を断腸の思いで切りました。不安いっぱい迎えた立春の頃、例年通り多くの花を咲かせてくれました。まずひと安心です。そして徐々に実を太らせ、青梅になり、数度の春の嵐を乗り越え、彼ら彼女らの名を冠する梅雨の頃にはほんのり黄色がかり馨しい香りを放ってくれました。

「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」という諺を知りました。桜は切り口が傷みやすいので無闇に剪定してはならない一方で、梅は余分な枝を切らないと良い花や実を付けないのだそうです。

桜と梅は似ています。花びら、花柄、幹肌などを注意深く観察しないと見分けにくいものです。きちんと見極めて、それぞれに適した方法で手を掛けなければなりません。

昨春、入居者数名が大学受験をしました。不本意な結果に桜咲かずだった者もいます。私が枝を折ってしまったのか、もっと昔に誰かに折られてしまったのか、彼自身が折ったのか、特異な手入れが必要な品種の桜だったのか、そもそも桜ではなく剪定すべき梅だったのか、あるいは桃だったのか、はたまたそれ以外の何かだ

ったのか。私の観察は正しかったのか。

そして、一年後の現在、雪辱を遂げようと再チャレンジしている者がいます。私ができること、ホームができること、法人ができることを模索し、最大限のサポートをしてきたつもりです。それでも、誰より悩み頑張ってきた彼の受け止め方が全てです。受験はまだ正念場です。

さて、砂糖に漬けた梅は、じわじわと果汁を出し数週間で爽やかな酸味のあるシロップになりました。塩に漬けた梅は、土用干しを経て、ご飯と海苔のエスコートを待っています🍱

焼酎に漬けた梅は、何年も寝かせると深いコクを出すそうです。できあがりも速さも違えど、それぞれに素晴らしい魅力を発揮します。

梅しごとが、彼らとともにあゆむ私に、大切なことをまた教えてくれました。(大坂賢志)

### 青年よ、旅に出よ

とびらの家は本年度、真如苑様の「自立援助ホーム支援助成」を賜り、「青年よ、旅に出よ～コロナ禍で失った青春を取り戻せ～」プロジェクトを遂行しております。

人はその移動距離が成長に比例すると言われることがあります。多感な青年期に様々な場所に赴き、見聞を広げることは自己形成にとって肝要だと思いますが、コロナ禍において、外に出ること、楽しむことを自粛させられてきた今の若者たちは、そのような機会を深刻に喪失しています。人生で今しかない青年期に、知的好奇心、芸術、文化、歴史、情操、自然等への感受性を養うような働きかけ、また、自分の希望を実現するために計画段階から主体的に取り組む経験を積むことで自己決定、自己実現の練習の場としたいと考えました。



夏休みに大学の友人と旅行に行きスポーツや夜通しのおしゃべりを楽しんだ者、部屋の窓から熱海の海上花火を鑑賞できるホテルに宿泊した者、海辺近くのボランティアスタッフさんの別荘を尋ね、磯遊び、港町散策に豪華海鮮を楽しんだ者。この春休みに旅行を計画中の者。受

験が終わったら晴れ晴れしくと密かに企んでいる者。それぞれが、自身の希望を整理し、計画、実行と進んでおります。

ご支援くださっています真如苑様に、心より御礼申し上げます。誠に有り難うございます。

(とびらの家 職員一同) 🍷

夕やけ荘便り Part.38

## 勝手知ったる新職員



朝晩の冷え込みが厳しい今日この頃。宿直明けで朝、お庭の畑を見ますと霜が降りています。

子どもたちからは「寒すぎ。学校（バイト）行きたくない！」という声もありますが、この寒さのおかげで、畑の大根の甘みが増すのかな



〜とポジティブな面もでございます。今年は大根の出来が良く、質、量ともに申し分なし。他ホームの皆さんにもおすそ分けができるほどでした。

いつも温かいご支援や応援をいただきありがとうございます。2024年は入居者4名でのスタートとなりました。

2023年を振り返りますと、大学生の実習受け入れや、法人契約のアパートでのひとり暮らし体験の実施など、夕やけ荘として初めての取り組みが多かった一年でした。

そして一番のトピックは……「早野さん、職員になる」の巻です。

……新しい職員はどんな人だろう？ と楽しみながらも、心配なような様子だった子どもたちに、既に見知った早野さんの入職を伝えた時の、ほっとした様子がとても印象的でした。

2023年8月に入職しました、早野直美です。2022年11月よりボランティアスタッフとして、週一回夕やけ荘の皆さんと過ごし始めました。その後、声をかけていただきカリヨンに入職し、夕やけ荘の一員となりました。

経理事務、高校教員、専業主婦、学校給食調理員と、様々な時間を過ごし、子どもの手が離れたことを機に、今に至ります。

夕やけ荘に来てからは、子ども達から給食の献立のリクエストをもらい調理したり、たくさんおしゃべりしたり楽しいひと時。その反面、自分の思っていた方向に進まないこともあります。

一つひとつの出会いや出来事を大切に、子ども達が今何を求めているのか、今自分に何ができるのかを日々考えながら、子ども達、職員の皆さんと一緒に一歩ずつ歩んでいけたらと思っています。

これからたくさん迷う事があると思います。色々な場で、色々な声を頂けたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

2006年3月に開設した夕やけ荘。累計利用者数はもうすぐ100名になります。

12月のクリスマスパーティーには、子ども連れで参加してくれた卒業生もおり、久しぶりに甥っ子姪っ子に会えた親戚気分（一方的+勝手に）の職員は、成長を喜ぶと共に、2020年3月を最後に開催できずにいた、「ひな祭りパーティー」の開催を決意したのでした。

「ひな祭りパーティー」は、夕やけ荘のいわば“ホームカミングデー”です。江戸川区に当ホームがあった頃から、毎年この季節に開催し、お料理をたくさん準備して、美味しく和やかなひとときをすごしてきました。開催に向け、鋭意準備中！ ご報告は次回NLをお楽しみに！

今年も多くの方々に支えられながら、子どもたちと一緒に元気に頑張っています。引き続き、よろしくお願いいたします。

(夕やけ荘 職員一同) 🍷

子どもの家ガールズとともに Part.44

## 誰かの「困った」に

ガールズの玄関では、仲良し2人組がお客様をお迎えしています。島田ゆかさんの絵本の人気者“バム”と“ケロ”です。この冬、ついにおそろいの赤い布製手作りベストを着てお出迎えをするようになりました。2人組のうちの小さな緑色の彼（ケロちゃん）が先に着せてもらいました。私がガールズに来た頃の出来事です。当時の入居者が職員のアドバイスを受けながら製作、完成させて転居していきました。

そして昨年12月、その時は突然訪れたのです。クリスマスのデコレーションが外された相方くん（バム）の肌の白さに「（このままで）可哀そう。寒そう。」と彼女は言いました。はぎれの布を選ぶ時にも「おそろいがいい



よね。寂しくなくなるよね。」と話していました。そして、2人はついに！おそろいのベストを身に着けるようになりました。

子どもシェルターにやってくる子たちは、皆それぞれに自分の身の回りの不自由さや理不尽と折り合いを付けながら、それらとの闘いの末にここにたどり着きます。ところが、ボランティアスタッフさんが作ってくださるおいしいご飯をいただき、ベッドで眠り、幾日か過ごしていくうちに、自分の「困った」をさて置き、別の誰かの「困った」にアンテナを向けることができるようになります。凄いことです。その

「困った」への寄り添いは、例えば、自分の後に新しくやって来た誰かの始まりの日々のお手伝いの時もありました。シェルターでの生活の中で足りない物を職員に激烈に伝え、自分の後

にやって来るであろう誰かが、自分と同じように困らないように尽力してくれていたこともありました。（…しかし、これには、若葉マーク職員の私は、その想いの強さに私自身のLPをかなり持っていかれてしまい、一時戦闘、いや対応不能に陥ってしまうという不覚の事態となりました。その節は、法人の皆様のお知恵とお力を拝借し私も「困った」を助けられました）お互いに人のことを気にして決められない時には「じゃんけん」という手段を使って乗り越えることを教えてくれたこともありました。

昨年末の彼女は、丸くて白くてぶさかわな小さきものに、自分の優しさを与えて気持ちの整理を付けながら、無事に転居していきました。私は、人のために想いを寄せる場面にたくさん触れることとなったのでした。予想外でした。

私は、シェルターという場所での子どもたちとの短期的な関わりや支援に戸惑いを持ちながら取り組んでおりました。そんな当たり前のことにすら迷っていたのでした。ところが、そういう気持ちを軽くしてくれてのが、こういった入居者さん達との関わりだったのだと気付くのでした。「支援者」だと思っておりましたが、私は「支援され者」だったのでした。お礼の言葉や褒め言葉。笑顔。挨拶。勇気を出して行動した後の「頑張り報告」。日々のおしゃべり。これらが、私をここに繋ぎとめてくれていたような気がしています。思いやることが次の優しさに、次の行動に繋がるそんな当たり前に触れた日々でした。

今年は、始まりからドキドキするようなことが続き、どんな一年になるのか全く想像が付きません。でもしかし、そんな時だからこそ、人の力を信じて暮らすことが大切なのだと自分に言い聞かせると同時に、それもこれもこのニュースレターの原稿を書く機会を与えていただけたからこそその気付きなのだと感じております。

最後になりましたが、法人の活動へのご理解とご協力、様々なご支援を賜り感謝をしております。皆様にとってよい一年になりますようにと心から祈っております。

（ガールズ職員 中島朱美）

## もがれた翼 Part.28 『シン・フォニイ』上演報告



東京弁護士会子ども的人権と少年法に関する特別委員会主催「もがれた翼 Part.28『シン・フォニイ』」が、2023年10月7日～8日 豊島区あうるすぽっとで上演されました。

こちらもうしぶりの劇場公演。2回公演とも、300席の客席が満席となる盛況に感謝の気持ちでいっぱいです。応援して下さった皆様、ありがとうございます。来場くださったのに、おはいりいただけないお客様もいらっしまったということでした。申し訳ありません。

もがれた翼は、カリヨン子どもセンター設立のきっかけともなった、子ども的人権にまつわるテーマを広報啓発する演劇イベントです。

『シン・フォニイ』のテーマは「アドボケイト」、子どもシェルターが舞台です。精神不調を抱える母親との関係に葛藤を抱え、子どもシェルターへやってきた16歳のアイリ。アイリ

の思いや今後の生活への希望を職員、子ども担当弁護士、児童福祉司らが聴こうとしますが、これまで自分の思いを言葉にする経験をしてこなかったアイリにとっては“自己決定”も“意見表明”も難しく感じてしまい……。また相手によって、話したい内容が気持ちが変わってしまうことに、アイリ自身も、おとなたちも戸惑います。子どもの思いと、おとなたちの思いが響きあう物語でした。

ご覧になった方たちのアンケートからは、「アドボケイト（代弁、意見表明の支持等）」は、福祉施設の専門的（マニアク）な技術ではなく、家庭、友人、地域社会のなかでも必要とされるものだと感じた、という感想も寄せられました。

出演した高校生、大学生の迫真の演技にひっぱられ、おとな役の弁護士たちも熱が入りました。上演映像が、今後 Youtube で期間限定配信される予定ということです。お楽しみに！👏



### 編集後記

遅ればせながら明けましておめでとうございます。News Carillon53号をお届けします。

2024年の幕開けは、甚大な被害をもたらした能登半島地震で始まり、死者行方不明者250人余り、今も避難所で不自由な生活を余儀なくされている方々が大量にいらっしまいます。亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。

2004年6月にNPO法人として発足したカリヨン子どもセンターは今年で20周年を迎えます。カリヨン子どもセンターは発足から今日まで多くの方々に支えられて参りました。様々な課題を抱えてシェルターや自立援助ホームを巣立っていく子ども若者のために、今後はOB・OGの支援のための新たな取り組みにも着手しているところです。

コロナ禍を乗り越えて、カリヨン子どもセンターは今年もいつもと変わらない入所者および退所者への支援を行うことを目指しております。カリヨン子どもセンターの20年の歩みはひとえに皆さまのご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

これからも変わらぬご支援を賜りますとともに、支援者の皆さまにはくれぐれもご自愛のほどお祈り申し上げます。(T.Y)

## News Carillon No.53

本誌は、社会福祉法人カリヨン子どもセンター事務局が責任を持って編集、発行しています。本紙に関するご意見、ご要望、掲載を希望する情報などがありましたら、下記までご連絡ください。

社会福祉法人カリヨン子どもセンター事務局

東京都北区赤羽西3-33-3

TEL 03-6458-9120 FAX 03-6458-9121

2024年1月30日発行（無断転載はご遠慮ください）